

## 講道館柔道、タイを往く—その9—

村 田 直 樹

前号迄のあらずじ。

知的な光をキラリとその瞳に漂わせるタイの青年に再会した私。今度は柔道場ではなく、国際交流基金バンコク事務所の中だった。図書閲覧室でバッタリ逢い、話が弾んで外に出る。青年の名はスリチャイ＝ワンケーオ。タイの名門、チュラロンコン大学の講師（政治学）だった。

「私の勤めるチュラロンコン大学では、アジア研究所、社会学研究所などの有志を中心に、‘日本製品反対運動後10年経って、よくなったのは何だろう’という長い名前のシンポジウムを開きましたヨ。」

そう言って、彼はそのシンポジウムの冒頭で朗読されたという詩を紹介してくれた。その詩は、日本製品不買運動なるものが起こった当時の日本製品が氾濫する実態を的確に伝えるもので、私はその詩を聴いているうちに何となく複雑な思いに浸され、朗読するスリチャイの顔を凝視した。で、その詩の内容は——？

\* \* \*

私の「日常生活」

サッカー＝ナンタナーウイット

寝ボケまなこをこすりつつ  
ライオン歯磨きで朝が来る  
食事の支度に手間ひま要らぬ  
ナショナル自動炊飯器

ボサボサ頭に丹頂ボマード  
スキッとこなす東レテロン  
腕に輝く男の勲章  
その名も高さセイコースポーツ  
ラジオはサンヨー 音質バツグン  
流れるニュースの心地好き  
自慢のマイカー ‘トヨタクラウン’  
いざや出陣町の中  
ハンドルさばきもさっそうと  
いとしき女のおんもとへ——

「よくぞ作った、書きました。貴方は本当にサッカー。」

私は洒落たが、目の前で朗読しているタイ人のスリチャイには通じなかったようで、こちらをチラリと見たが、直ぐ詩に戻った。

今日も今日とてショッピング  
やって来ましたダイマル・デパート  
よくぞ集まる人の群れ  
これ皆われらの兄弟姉妹  
カネボー ポーラにシセイドー  
パピリオ コーサー エトセトラ  
見ればおかしや おぞましや  
いとしき女の血ばしりまなこ  
さすがはダイマル よりどり見どり  
買いたい放題 見放題  
知らぬ人なし ダイマル商品

かたじけなくもかしこくも  
 ‘日出づる国’よりお出ましの  
 メイド・イン・ジャパンの高級品

この詩は当時バンコク最大の新聞「タイ・ラット」日曜版特集に掲載され、反日本製品運動に参加した学生の共感を読んだ由。私は聞いた。

「クン・スリチャイ（＝スリチャイさん）、この詩の中で大丸デパートが随分詩われているけど、何故に又？」  
 「チャイ クラップ（＝はい）。日本製品ボイコットの集会が初めて開かれたのがそのタイ大丸の前でしてねエ。」

タイ大丸は、バンコク目抜き通りのショッピングセンター、ラーチャプロップ地区の一画に在る。柔い中間色で統一された店内の装飾、流れるムード・ミュージック、輝く照明、ショーケースに並ぶ絢爛たる商品の数々。それ等の商品の殆どが、日本からの直輸入か日本が出資する合弁会社の製品であった。当時のタイ大丸は、日本の経済進出の象徴的存在だったのである。その大丸前。日本製品ボイコットの集会が初めて開かれた場所——。

スリチャイは言う。

1972年11月13日の夜だった。当時、バンコクは戒厳令下にあり、わずかに数人の集会でさえ取締の対象になっていた。

それがその夜は500人もの学生が集まったのである。

タイ人は日本の奴隷ではな——いっ！

大丸は出て行け——っ！

集会ではシュプレヒコールが繰り返され、集まった人々はデモに流れていった。この日以降、不買運動の終わる迄、大丸は

学生達の様々な抗議行動にさらされることになる。

街には日本製品不買運動をすすめる様々なポスターがはられた。チョンマゲ姿の日本人が、タイ人の背中に股がって日の丸を振るうポスター。ボクシングで日本人がタイ人を打ち負かす図。中には赤い日の丸に白で×印を付けた上に、黒で「対日輸入超過1億5000万パーセント」と書き加えてあるものまであった。

スリチャイはそう言って、再び目を詩の方へ落とし、朗読を始めた。まだ有るのだ。

家に帰ってスイッチ捻りゃ  
 色もクッキリ トーンバ・テレビ  
 チャンネル回して目を凝らす  
 サムライ映画の大立ち回り  
 何処から来たのか やぶ蚊が一匹  
 忘れていましたキンチョー・カトリ  
 独り暮らしの夜も更けゆきて  
 何故か恋しいトルコ風呂  
 いっそ行こうか行くまいか  
 不夜城「サユリ」が俺を呼ぶ

やっぱり出て来た、トルコ風呂。そろそろ番番と思っていた。ANAパックにJALパック。凄い名前の航空券。見ればおかしやおぞましや。これ皆日本の団体さん、と私も創った。

トルコ風呂「サユリ」も実在である。現地では今尚、Turkish bathなどと英語で表示されている。Turkish bathの本物とは違うのに。日本から輸入したものだからだろう、名称もそのままだ。

バンコクのニューベップリ通りに、この「サユリ」始め「ニュー・トーキョー」、「アタミ」、「ハニー」等々10軒近く立ち並ぶ。その正確な数は分からないが、バンコ

クには50軒近いトルコ風呂が在ると言う。大抵が5、6階の立派なビルディングで、一階に大きなガラス張りの一角が在り、その中は赤い毛氈よろしく雑壇みたいになったフロアー。其処に何と200人からの女性が侍りけるを、だ。これが本当の選取見取か。戦後、日本の貿易商社がタイに進出した頃に始まり、近年のバック旅行の流行と共にその数は増える一方である。

日本から輸入したものの一つがトルコ風呂なら、同じ様に日本から輸入したテレビ番組の中にもかんばしからざる評判をとったものがある。

「熱血のジュードー」、「カラテ無敵」、「ケンドー無頼」、「リングの王者」、「ウルトラマン」等々だ。

毎夜サムライが出てきて人を斬り、ジュードーやカラテの達人が大技で人を傷つける。アメリカの西部劇にとってかわった日本のテレビ映画が、タイの人々の中に日本のイメージをどの様に植え付けたか、想像に難くない。

不買運動の底流には、こうしたサムライ、カラテ映画等の「文化的進出」への反発もあった由。スリチャイは詩の最後を読み上げた。

時代の波に乗り遅れまじと  
暮らす毎日 しんどい限り  
文化生活もいけれど  
これでいいのか俺達は？  
アサヒ・ガラスの鏡に映る  
自分の顔に問いかけりゃ  
いっそくやしやなさげなや  
われとわが身のグータラかげん  
俺たちゃ一体何者だ  
生まれ育ちは血統保証  
白日天下にまぎれなき

正直正銘のタイ人じゃないか——。

「コップ クン クラップ (=有難う)。これが、何だっけその……長い名前のシンポジウム……」

「‘日本製品反対運動後10年たって、よくなったのは何だろう’。」

「そうそう、その‘日本製品反対運動後10年たって、よくなったのは何だろう’のシンポジウムの冒頭で朗読された詩なんだネ。」

「ええ、そうです。」

スリチャイは眼鏡の中に微笑を見せて頷いた。一人のタイ人が、今、一人の日本人に対し、まさに日本のやり方とタイの在り方について話している筈。何年か前の私なら、相当カッカ来て、感情は‘何言ってやがるっ’、と一辺倒一直線に相手側に向けられ、批判と非難のごちゃ混ぜで対したるうに、今は全然異なった。独善的でなくなった。両国を視座に据えて聴いていた。そうしたら静かだった。

しかし又、事の重要性に私の神経が動めく風でもないのだった。嗚呼。ドイツ歴史学の泰斗ランケが言う如く、世界史の大事事件が起こった時点に於ては、誰もその致命的重要性には気付かないものなのか。

日本の経済進出。米国ではその報復措置の法案すら論議に上ってきている。東南アジア諸国に対する日本の経済進出、その功罪など私には全然ピンと来ていない。危機意識などまるでなし。

ジャーナリズムは言う。現代日本の経済進出は、恐るべき危機に直面している——。しかし、その危機の本質についてはどうなのだ。無理解であることの方が多いのじゃないのか。

霜を踏みて堅氷到る、というが、霜が降りた時点に於て既に、満山紅葉の秋は去り、極目蕭然たる厳冬の到来を理解しなければならぬ筈。

人は経済侵略とも言う。しかし私には全然ピンと来ていない。タイ人スリチャイとは違うだろう。

コーヒーをすすって私は遠くを見る眼付きになった。ぼんやり思った——明日もまた昨日までの如く、「永遠なる過去」の連続として暮れてゆくだろう。何の根拠もないうまま、ただ何となく、そう思いながら時を移すか、と。思ってもみよ、ロッキード事件やら、アキノ暗殺やら、大韓航空機墜落事件やら色々在ったが、当事者以外の人々には、風する馬牛も相及ばざる有様で、最早感覚記憶の外だろう。

日本製品不買運動。そんな運動が在ったことなど全然知らない。そして、その10年後のシンポジウム。10年後のタイの現実はどうなのか。よくなったのは何なんだ。

詩「私の日常生活」は、日本商品の波に呑まれた当時のやりきれなさを詩っている。その詩を聞く会場の反応は以外に明るかったという。詩の朗読が進むにつれて、共感の笑いを浮かべたり、ほろ苦い笑みをかみしめる場面が何度かあった、とも。シンポジウムの10年前にはその笑いはやりきれない怒りとなって、行動に結び付いたのだが。

年月を経て、事態は一体どう変化したのか。以下、再びスリチャイの言——。

シンポジウムの最初のパネラー（＝国産品振興協会書記）は次の様に訴えた。

「日本との貿易収支の赤字は、この10年間、毎年35%ずつ増え続けている。タイの入超、日本の出超という片貿易の構造は何

ら変わらない。政府がとってきた政策がうまくいっていないことがわかる。」

対日貿易赤字は、10年前の2億7000万ドルが今は12億ドルと4倍近い数字になっている。タイは原材料しか輸出できないが、この価格は低く抑えられ、反対に日本からの工業製品の価格はどんどん上がっていく。こうして赤字は累積していくが、それを止める有効な手段もないままに日を重ね、日本の商品が街にあふれかえる。状況は10年前と変わっていない。

パネラーの討論会の中では、「日本商品の市場に占める比率がこれだけ大きくなると、日本製品排斥運動がもう一度起こり得る心配もなくはない」との結論に達した程である。

ただ、そのかわりに会場が明るいのは、当時と他の状況が変わっているからであった。日本人のセックス・ツアーは相変わらずその会場でも問題となったが、それ以上に日本とタイの色々なレベルでの交流が進んでいる事実が在るからであった。

川端や漱石がタイ語に翻訳されて売れているし、福沢諭吉の『学問のすすめ』、中根千枝著『タテ社会の人間関係』なども出版されている。知識層の間では禅がブームで、大学の前の小さな本屋にさえ、5冊も6冊も禅の入門書、解説書が並んでいるほどである。

日本からの援助で、日本学の講座があちこちの大学で設けられ、日本を研究する学者の数も増えた。色々な機関や私立の日本語学校も結構流行っている。

テレビも、日本商品のコマーシャルは相変わらず多いが、かつての殺伐としたチャンバラ映画にかわって、今人気を集めているのは「ドラえもん」や「一休さん」になった。

あのタイ大丸も、タイの商品をショーケースに並べるようになった。かえてお客が増えたという。

日本商品排斥運動当時、同じように取り上げられたタイ人スタッフの昇進問題も、現在、日本の企業はタイ側の要求にそって、少しずつ管理職のポストをタイ人に任せるようになってきている。日系企業に働くタイ人の中には、労働の質では変わらないのに、日本人の7分の1の賃金しか貰えない、と不満を訴える者が多いのも事実だが、10年前と比べれば、日本人幹部との関係はうまくいっていると言えるようだ。当時「エコノミック・アニマル」とともに使われた「イエロー・モンスター」という言葉は影ひそめた。

「なる程ネ。当国の動向が少し判ったヨ。」

と私は言って話を打ち切りたかった。少しくたびれてきたのである。国際交流の話は結構だが、もう少し別の側面で話がしたくなっていた。それを知ってか知らでカスリチャイは言った。

「最後にもう少しだけ話させて下さい。  
これで終わり。総括といきましょう。」  
「OK, Keep on please.」

コーヒーカップはもう空っぽ。おかわり頂戴。来た！美少女のウェイトレス——。固い話が英語で続き、私の頭はバテテ来て、視線は此方に移りゆく。

（可愛いなア。この肌の浅黒さ。ウーム、セクシィ！）内心の声。

一方スリチャイ先生、最後の件をこう締め括った。

「日本側の努力の成果に加えて、1976年10月に起こった学生運動の大弾圧の経験、日本商品氾濫の裏で暗躍する政治的指導者やこれと結んだビジネスマン達の存在が見えてきたこと、政府の政策面の対応の拙さなどもタイ国中に判ってきていること等々、簡単に10年前の再現という様にはいきませんヨ。

でも思いましたネ。会場でシンポジウムを聞きながら、日本商品氾濫の背景に在るこの国の工業化の方向について反省しない訳にはいかないって。

タイは既に経済社会開発計画に則った工業化の道を歩み始めているんです。その中で10年前に起こったあの日本商品排斥運動は、一部ではこういう日本や西欧に従属的な工業化、或いは近代化、に対する人々の抵抗という側面があったのではないか。こうした経済的な自立を目指した民衆の運動があったのに、そのヴィジョンは今や行き詰まっているかのように見えるんです。

我々は再び、タイ国に於ける我々自身の近代化の意味を問い直さなければならぬ時じゃないのかって思うんですヨ。」

スリチャイの微笑は最後迄消えなかった。その表情が、会話の雰囲気を終始、和やかなものにしてきていたのも事実。タイスマイル。イイじゃないか。日本人だと仲々こうは行かないヨ。仏頂面か無関矢鱈のスマイルか、で。

私はこの青年に逢えて好かった、と思えてきた。タイ日交流の側面に触れ得た、と思った。そしてそれを有意義、と。

2杯目のコーヒーはおいしかった。話も

終わったし、最後に登場した美少女のウェイトレスがよかった。

スリチャイと私は再会を愉しみに、とお互いに言って店を出た。私の心、美少女に残って……。



奈良の大仏とどっちが大きいかなー  
於スコータイ旧跡

つづく